東京タイムズ

〈13版〉

THE TOKYO TIMES

50円

日刊C1981（昭和21年3月7日第三種郵便物認可　昭和37年11月13日国鉄特別扱承認第340号）

異端者扱いされ、泣く泣くの特効薬

ゼンソクの謎

〝赤ひげ〟道 56年

問われる医療のあり方

第二の丸山ワクチンか

金コロイド注射療法 因果関係分らず

東京・中野の杉原医師

素質面も原因の病気　すばらしい着眼

ゼンソクの謎を三十年ぶりに解き、近く「せんそくよ　さようなら」という著書を出版する日大医学部講師、中山博夫さんの話　日本の医学界では、ゼンソクといえば花粉やダニのゴミ、ダニなどによるアレルギーが原因と考えがちだ。しかし、私はゼンソクの原因はアレルギーだけでなく、杉原さんのいう気管支の敏感性など遺伝的な点などいろいろあると思っている。その意味で、治療法も種々あってしかるべきで、杉原さんの金療法とアドレナリンを使ったタン吸入などもその一つだ。金療法については最近、西ドイツなどヨーロッパでもゼンソクの治療に使われていると聞いている。私自身、杉原さんをよく存じ上げており、立派なお医者ですよ。

不治の病といわれるゼンソクを独自の治療法で、これまでに数千人もの患者を根治してきたという医師がいる。回復した患者の中には作家の吉行淳之介氏などのほか、外国人も多く、最近ではその評判を聞き、PLO（パレスチナ解放機構）関係者まで治療を受けにくるという盛況だ。しかし、治療の主体となる金コロイド注射は公には認められているもののゼンソクとの因果関係がはっきりしないことなどもあり、権威を重んずる医学界の主流からは冷遇視されているのが現状。〝明確な理論立て〟が先決か、それとも患者の治療回復が大切か――丸山ワクチンや漢方治療と同様、医療のあり方を問うている重要な意味を示唆しているようだ。

ゼンソク治療に執念を燃やす杉原博士

この医師は東京・中野区本町二丁目、国際仁友病院院長の杉原仁座博士。杉原博士は大正十四年、当時の東京帝国大医学部を卒業、東邦医大、昭和医大などでゼンソク研究、治療に専念してきた。同病院を開設したのは三十四年六月だが、「大学病院のゼンソク外来の診察はせいぜい週に一回。これでは押しかける患者の治療も満足にできない。開業医になってこうした患者の不満を解消しなければ…」（杉原博士）という理由からだった。遅ているワイシャツなどは汚れ、金銭にも淡泊で現代版がひけといった感じの人だ。

現在、ゼンソクの治療は、屋内のゴミや花粉のアレルゲンを減め、その後を注射し、病状にならすという減感作療法が多くの病院で取り入れられている。この療法はゼンソクの原因が、花粉や細菌酸ガスなど刺激性ガスに汚染されたなどの結果、気管支がアレルギー反応を起こすことがあるという考え方が有力になっている。

しかし、杉原博士の認識はかなり違い、「気管支のアレルギーだけをなくしても効メで、要はゼンソク患者の気管支の過敏性を治すことが大切だ」というわけだ。

と同時に、気管支の敏感性の治療にはそこにたまっているタンの除去が不可欠だ――としている。

このため杉原博士のゼンソク治療は①気管支のタンを取り除くこと②刺激性のあるほこりやにおいを極力避ける③ソルガナールという金コロイドの注射による体質改善――が三本柱。特にソルガナールの注射がポイントだという。この注射液は西ドイツのシェーリング社製で、もともと、結核の薬として使用されていたもの。米国ではリューマチの薬とされてきた。原料の主成分は純金だそうで、これを蒸留に溶かしアンプルに入れてある。このソルガナールを週一、二回、腰部などに注射するのだという。

吉行淳之介氏

杉原博士がこの注射をゼンソク治療に取り入れたのは六年前、東大の稲田内科にいたころで、まったくの偶然から。「ある時、ゼーゼーいう声を出す結核患者にソルガナールを注射したらこのゼーゼー症状がなくなった。もしや、ゼンソクにも効くのではと思い、臨床実験を重ね、確信を得た」というのだ。もっとも戦争中は、ソルガナールの輸入がストップし、研究が中断するなどアクシデントも起こった。

この治療法でゼンソクが治ったという内外の名士は、たとえば作家の故木村毅氏、吉行淳之介氏、熊本放送前常務の村上勇城氏、在日インド大使館元一等書記官トリベリー女史、米女流作家ヘンリー夫人などと多士済々。

これらの人を代表して吉行氏ところ、センソクに悩まされ杉原博士の治療を受けた吉行氏は「それまでステロイドホルモンによる治療を受けていたが、副作用などもあり回復がはかばかしくないので杉原先生の門をたたいた。主にソルガナールの注射を打ってもらったが、わりと短期間で治った。先生の功績は治療だけでなく、気管支のケイレンによると思われていたセンソクが粘膜の異常分泌によるタンの仕業だと突き止められたことだと思う。身なりや金もうけにも淡泊で、ほぼ実直しいという感じでガンコな方だ。まったくセンソクのオニという感じだった」と語っている。

すでに数千人根治

海外からも「助けて」

現在、その評判を聞き、いろんな人が治療を受けているが、その中には きわめて特殊な人も多い。パレスチナ解放運動組織、PLO東京事務所長のファヒト・アブドル・ハミド氏もその一人。同氏は四年半ほど前に来日したが、四、五カ月ほどで、かなり重いセンソクになった。東大病院などで検査し、いろいろな治療を受けたがダメ。入づてに杉原博士のことを知り、昨年十月から治療を続けているが、セキ込むこともかなり少なくなるなど全治に近い状態になっている。このためドクター・スギハラの名はパレスチナにも聞き、PLOの下部組織、ファタハの幹部も先月二十五日、内々で来日、通院している程だ。

この療法ぶりに反して杉原博士の悩みはつきない。というのも、昨今の金高騰で、ソルガナールのメーカー、シェーリング社が昨年十二月、「コスト高になる」（日本シェーリング社）という理由から、ソルガナールの製造を中止したことだ。その代替品は小野製薬のキドンがあったが、これもペイしないという判断から、これまた最近、製造をストップ。わずかに塩野義製薬のシオゾールがあるものの杉原博士は「最分的にもやや遠い、ソルガナールほど効き目が…。なんとしても日本でライセンス生産されることが大切」と訴えている。

ところで、こうした杉原博士の治療法はわが国の医学界ではかなり異端的存在。似たような形で取り入れているのは東大物療内科や、東京・蒲田の東京友の会病院（外間一郎院長）などかなり限られている。というのもソルガナールがどうしてセンソクに効くか因果関係などを調べてもらったが、明確な回答が得られなかった。しかし治る患者が多く、内外から殺到しているのは事実。いま、杉原博士は「西洋医学の教育を受けた人が私の治療法を批判するのは当然。しかし、要はセンソクが治れればいいのではないか。それが医学の心だ」と語っている。